

近代の帰趨を問いつづけて 追悼 山之内靖先生

岩崎 稔

東京外国語大学の名誉教授であるとともにかつては海外事情研究所の中心メンバーであり、わたしたちの敬愛する先達であった山之内靖先生は、2014年2月2日の夕刻ついに帰幽された。その少し前から厳しい御病態にいらっしゃったから、ある覚悟は持っていたものの、いざ訃報に接してみると喪失感ばかりが大きい。

東京大学経済学部で大塚久雄の一学徒として出発しながら、60年代末の沸騰する状況のなかでは『マルクス・エンゲルスの世界史像』（未来社）を情熱的に主題化し、70年代には、のちに『現代社会の歴史的位相』（日本評論社）としてまとまった諸論考によって、マックス・ウェーバー理解とパーソンズのシステム理論を独自の視点から大胆に再吟味する仕事に取組まれ、近代そのものの限界を見極めようとされた。それは、大塚シュレーを規定している近代主義という制約を、内側から突き破って行く「父殺し」の自己格闘であったのだろう。

私が一当事者として共有させていただくことができたのは、山之内さんが、高度資本主義のポストフォーディズムや「柔らかな生産」を歴史的に解明するなかから「総力戦テーゼ」を提出されるにいたった時期からであった。80年代末に『世界』に発表した論文を皮切りとして、山之内さんは、ファシズムであれ、ニューディールのアメリカであれ、日本の超国家主義であれ、どの社会システムも全体的な戦時動員のための「総力戦体制の構築」という根本的に同一の動態を持っている、という大胆な問題提起を行った。戦前戦中から断絶した聖域として平和な戦後像を安逸に擁護することのなかに、近代が生み出す帰結に対決することの尻込みする「精神の退嬰」を見ていらっしゃったのであろうが、そこで問われていたのは、特定の歴史解釈だけではない。80年代末は、ベルリンの壁が崩壊して国家「社会主義」が終焉するとともに、対抗者を失った資本による新自由主義的な社会編成が世界をあまねく覆い始める状況であつ

たが、山之内さんは、この転換が戦後を規定してきた総力戦システムそのものの自壊であり、人間はそれとともにこれまで未経験の危機の水域に踏み込むことを意味する、と診断されたのであった。歴史学、思想史、経済学、教育学、政治学から文学まで、多様なフィールドの研究者が、山之内さんの人柄と知的挑戦に共鳴して集まり、そこに生まれた日米の共同研究ネットワークのなかから、『総力戦と現代化』と『ナショナリズムの脱構築』（ともに柏書房と Cornell University Press）という二つの影響力ある論文集が日本語と英語で出版されることにもなった。

山之内さんの研究の軌跡は、つねに反骨者のそれであったから、誠実でひたむきであっても、どこか張りつめたものだった。廣松渉さんの物象化論に対してあえて疎外論の意義を堅持して論戦に臨んだときも、岩波新書『マックス・ウェーバー入門』でニーチェ的なモメントを強調してまったく新しいウェーバー像を提示したときも、あるいは『現代思想』に連載したフョイエルバッハと初期マルクス論を『受苦者のまなざし——初期マルクス再興』（青土社）としてまとめ上げられたときも、私たちは、つねに論争を大切にし、知的冒険を楽しむはつらつとした学究の範例を見ることができた。山之内さんに教えられた数多くのことのなかで、もっとも印象に残っているのはその点だ。いまはただ、先生の御冥福を静かに祈りたい。

（いわさき みのも・東京外国語大学大学院総合国際学研究院）